

海外シリーズ③

滞米生活雑感



井上 健

ニューヨーク駐在として滞米生活を始めて早や5年を過ぎようとしています。今回、海外シリーズに何か書けとの御指名を受け、日頃の先生方及び皆様への御無沙汰をお詫びする意味も含めてペンを取る事にしました。

ただアメリカについては、出張・駐在経験者も多数居られると思いますし、又沢山の体験談やノウハウものの本が出版されているため、題材の選定に非常に困りました。しかし私の肌で感じた印象をいくつか羅列する事により、アメリカの1側面がお伝え出来れば望外の喜びと書いてみる事にしました。

— アメリカ版大岡裁き —

アメリカは、弁護士の数が日本と比べると圧倒的に多数であり、また訴訟件数も非常に多い事からギスギスした潤いの少ない権利の主張だけで張り合っている社会の様に、受け取られ勝ちです。が、確かにそういう面もある一方、仲々味のある裁判の判決が下される事もあり、結構ほのぼのとした雰囲気を感じる事があります。

もう2年前の話と思いますが、IBM産業スパイ事件があった時、1被告として日系アメリカ法人

の日本人代表者が、単独で裁判を受け判決を下された時の事です。当時アメリカでの失業率が上昇中であった背景もあり、被告人に対して実刑のかわりに、数カ月間の週末の社会奉仕と、アメリカ人をその日系法人に最低1名雇用する事を義務付けた判決が下されました。被告人はむしろ社会とより多くの接触を保ちながら、社会的矯正をするのが良いとの見方がその背景にある様に感じられましたが、仲々日本では見られない判決と、強く印象付けられました。また、1年前、フットボールの花形選手がディスコで客とトラブルを起こし、暴力沙汰になった事件がありました。内容的にはそれ程大きな暴力ではなかった様ですが、約半年の裁判の後、次の様な判決が下されました。暴力沙汰については喧嘩両成敗と考えられるが、フットボールの花形選手として未来ある少年達を、健全なチームワークが保てる様に引っ張って貰わなければならない立場と考えられるため、オフシーズンに週2時間4週間にわたり、子供達にフットボールをコーチする事を刑に変えるとの内容でした。この様に、その場その時の状況をうまく把握、被告人にも又周囲の人間に対しても、何らかの意味ある形で社会還元が出来る様にとの配慮が感じられ、印象深いものがありました。

— アメリカ大統領選挙 —

私の滞米5年の中で割合いと大きな出来事は、2度の大統領選挙を現場で経験出来た事だと思えます。結局2度ともレーガン大統領が勝った訳ですが、80年のカーター対レーガンのテレビ討論会（ディベート）も84年のレーガン対モンデールのディベートも、テレビの前に釘付けにされる、スリリングでかつ面白いものでした。80年の時は、朴訥としたカーター色が4年の任期でその新鮮味が薄れ、むしろ融通の利かない田舎者の雰囲気強調されたのに対し、レーガンの方は、表情豊かに、強いアメリカを、そして暮し向きを良くしたく有りませんか？と問いかける戦略を取り、その戦い方が功を奏し勝利を勝ちとりました。一方、84年の選挙では、守勢に回ったレーガンが初回のテレビ討論会では非常に固くなりまた口調も滑らかさがなかった為、大分モンデールにポイントを取られました。第2回の最終会では、本来の笑顔と表情豊かな口吻で軽くモンデールの追撃をかわした為に、元々持っていた優勢の勢力分布を失う事なく楽勝した事は記憶に新しい事です。

日本と異なり、大統領候補者をはじめとする政治家達は、私達にも解り易い言葉で、しかも原稿もなしに、自国のみならず、世界の動きについても常に正々堂々と自分の意見を主張し、またそれらが論理的である事に常に気を配りながら議論を戦わせています。その気配りと能力に感心させられたのと同時に、自由なそしてスリルある雰囲気、すっかり魅せられました。

— 環境が人を創る —

少し話を変えて、文化的社会的教育環境に目を向けてみたいと思います。ここでの話題は学校教育の平均点云々と言う事ではなく、アメリカの持っている美術館・博物館・動植物園そして公園がいかに整備されているかを取り上げてみたいと思います。たまたまニューヨークという非常に整備された環境にいる事は確かな様ですが、市内だけでも約200の美術館・博物館があり、例えば絵画にしても、教科書に出て来る様な絵が至る所で見

られ、また著名作者の絵が制作年代順に多数にわたり展示されているのには、全く圧倒されます。何度か足を運んでいる中に、説明書き等から時代の背景、その人の人生の紆余曲折などが自然に学べ、なおさら面白くなっていくという非常に良い循環が出来て様になっています。また自然史博物館などで、陳列されている動物達の剥製も行儀の良い形だけでなく、むしろ生きている動きの一つの典型を剥製にしてディスプレイしている為に、どのような環境で動物達が生活しているかが一目で判る様な工夫もされています。週末ともなれば、どこも子供連れで賑わっていますが、この様な環境は自ずと幅広い知見と視野を持てる人間を育てる様に感じられます。多くの貴重な絵画や種々の展示物は、アメリカの力と資力で買い漁った結果とも言えますが、「百聞は一見にしかず」で非常に貴重な教育材料になっている様な気がします。

— 自動車の制限速度 —

私達がアメリカを語る時に必ず一つの話題を形成するのが、広大さと車社会である事だと思えます。ロッキーの山奥に入ろうが、ネバダの砂漠に入ろうが舗装された自動車道が延々と続いているのには全く驚かされます。が、その割に知られていないのが全国一律最高速度は、ハイウェイといえども88KM/時である事です。昔はテキサス等の一部では制限速度さえ必要のなかった時代がありますが、オイルショックを受けるや直ぐにこの制限を導入してしまいました。この制限速度制定には、安全面も大きな要因として考えられたのですが、石油の節約に本格的に取り組んだアメリカの一面を伺い知る事が出来ると思います。因みに、アメリカも原油輸入国となっていますが、第1次オイルショックから第2次オイルショックにかけ、必要全原油量中の僅か4%程度しかアラブOPECに頼らなくて良い状況を創り上げています。元来資源の有る国とはいえ、かなり読みの深い備えをしている事は、世界的な政情バランスを常に見ていかざるを得ない日本人としては、注目しておく価値がある様に感じています。

— アメリカの社会的不安定要素 —

又々話題を変えますが、アメリカは人種も言語も又文化も歴史も大変に錯綜している為に、その社会は複雑な歪みを持っている様に思えます。セキュリティ（安全）の問題はよく話題に上る事ですが、ここでは余り日本では話題にされない子供の行方不明（ミッシング・チルドレン）について言及してみたいと思います。最近の新聞の統計によりますと、年に150万人（18歳以下の子供）の子供達が行方不明になっているとの事です。尤も、その中の100万人は家出との事です。この家出の原因の大きな要素として家庭内暴力がある様です。ここで言う家庭内暴力は、むしろ大人が子供に対してふるう暴力が中心となっています。それ以外の約50万人は、離婚家庭で養育権を得られなかった親が、無理に引き取り行方をくらますものが数えられています。もちろんこの様な暴挙は親といえども許されない為に統計に乗ってくる訳です。最近では2万人という膨大な数の子供達が、誘拐されていると推定されています。この数字は、日本人の私達には全くと言っていい程理解の範囲を超えるものですが、さすがアメリカでも社会問題となって居り、幼稚園や小学校ではその防止策として「知らない人にはついていかない」との教えはもちろんの事、子供達の指紋のファイリング等々の事後対策に備える所も増えています。街頭のポスター等でミッシング、チルドレンとして賞金付きで情報提供を要請したり、紙製ミルクボトルに写真入りの尋ね人が印刷されたりしている事は、全く日本社会では考えられない事と思います。こういう面でのアメリカは、正に病める巨人と言うところかと思えます。

— 日米貿易摩擦 —

以上いくつかのアメリカの側面を書いて来ましたが、最後に最近話題になっている貿易摩擦に触れてみたいと思います。貿易摩擦は一部でいわれている様に文化摩擦であり、又1国1民族1言語の日本と、多民族多言語の欧米の摩擦であるとも言えると思います。基本的に歴史的背景の違う多

民族が集まっているアメリカでは、「暗黙の諒解」とか「以心伝心」という事は有り得ず、必ずルールが作られ、それをフェアの精神で守る事が一つの決まりとして社会が機能しています。アメリカ流が決して良いとは言いませんが、何等かの摩擦が起きた時には、相手の立場に立って一度考えてみるという事は、私達にとっても必要な気がします。もちろん相手にも正々堂々と同様の要求をする事も必要でしょう。ただ残念ながら、その辺の対応の仕方が日本人は余り上手でない様な気がします。ある面では自分を上手に表現・宣伝する事に馴れていない私達日本人の当然の帰結と言えるのかも知れませんが、このハードルを超える事から、日本の国際化と貿易摩擦の緩和策が生まれてくるのではないかと思っています。

（昭和60年5月15日記）